

私の歩んだ仏の道

浅田正博（恵真）

[014]

本願寺出版社

はしがき

私は在家の医者の子として生を受けました。五歳の時に縁あって浄土真宗の寺院に養子に入り、中学校の二年生までお寺で育ててもらったのですが、その間にはほとんど仏教に関心を懐きませんでした。十四歳の時のことです。小児性心内膜炎という心臓病に罹り実家にかえって療養生活を送らざるを得ませんでした。一時は生死の境を彷徨うほどの重症でしたが、皮肉にもその中において初めて仏教に関心を懐いたのです。ところが病気が全快しますと仏教のことなどまったく忘れて健康を謳歌し、放逸の生活をむさぼるようになりました。その反省から真剣に仏教を求めようとしたのですが、どうしても他力本願の教えには納得できず、がむしゃらに自力の世界に身を投じました。四国八十八ヶ所巡礼から始まって様々と模索しながら「盛永宗興老師」という素晴らしい禅

の師匠と巡り遇ったのです。

しかし、今度は自分の機根がそれについていきませんでした。七年間の禅修行の果てにやっと気づいたのが自己の愚かさでした。自力の世界にあこがれながらも思いが遂げられなかった私は、無念の思いからしばらくは仏教の学問のみに没頭したのです。ところがその学問の師匠が、実はたいへんな他力のお念仏を喜ばれる念仏者たちだったので、自力の世界しか見えていなかった私は、素晴らしいお念仏者の先生にまったく気づかず、外の世界ばかりを見つめていたことになりました。

花を求めて西また東、わらじ切らして帰ってみれば、家じゃ梅めが笑ってた

という狂歌がありますが、まさに灯台下暗しだったことにやっと気づいたので。

そのお念仏者とは、私に天台教学を教えてくださいました佐藤哲英先生であり、大学入学時からお世話になっていた土橋秀高先生でした。特に佐藤先生の臨終時の様子からはお念仏のすごい力を感じましたし、土橋先生の晩年のお姿からは、念仏を喜ぶ者の感動を教えてくださいました。ここに至って初めて私の心の中に他力の教えが徐々にしみ渡っていったのです。

ところが、この他力の教えはそう簡単に領解ができませんでした。自分ではお念仏を喜んでいられるつもりになっていた矢先のことです。実母が臨終を迎えたのです。母は私に「死が怖い！」と漏らしました。「一緒にお念仏を称えよう」と言えば済むことだったのですが、どうしても私にはその言葉が口をついて出なかったのです。今考えても「なぜ？」と思うのですが、私は心の真底より「お念仏を納得できていなかった」のです。少しでも疑いが混ざっていたからこそ、実母の臨終に際して自信を持ってお念仏を説くことができなかったのだと思います。情けなくも悲しく感じたものでした。信仰心の確立というのは実に難しいものです。

本書は、浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター編集の『季刊せいてん』に「入門講座」として十三回にわたり連載された「私にとつての仏教」を再編したものです。そのタイトルが示しますように、まさに「私にとつての求道遍歴の書」であると言ってもいいでしょう。すでに齢六十に近づいた者がそれまでの心の推移を綴った、つたない「宗教的遍歴の書」として読んでいただければ幸せに思います。

平成十七年七月末日

成就山因念寺にて

浅田正博（恵真）

私の歩んだ仏の道

目次

一、諸行無常を知る

- 親友の突然死 15 諸行無常が納得いくまでの葛藤 19
死の恐怖 23 生活に即した仏教 26

二、仏教と出遇う

- 宗教つり革論 31 闘病生活の中で 34 仏像に魅せられる 38

三、仏はおわします

- 叡山学院の講師として 49 「好相行」について 55

- 堀澤祖門御門主の体験談より 60

四、阿弥陀仏を見たという体験談

- 見仏の体験談を聞いて 67 常行三昧について 68
常行三昧の体験談を聞く 75 常行三昧での見仏 81

五、自力道へのあこがれ

- 他力よりも自力への思い 89 四国八十八ヶ所巡礼の旅 92
修行の師を求めて 98 学問の師に出遇う 100 叡山修行のすさまじさ 103

六、盛永宗興老師との出遇い

- 明師に出遇う 107 カルチャーショック 111
毎朝坐禅へ 115 警策 120 足の痛み 122

七、坐禅に励む

- 坐禅以外の禅修行 127 托鉢 131 托鉢から教えられた心の汚さ 136

八、参禅の厳しさ

- 坐禅に取り組む 145 公案 147 ご案内 152 臘八の大接心 156

九、禅修行の果てに

- 臘八大接心の厳しさ 163 法を疑い、師を疑い、そして自分を疑う 169

自力の限界を見せつけられる 172

十、他力の教えのすばらしさに気づく

「学問と信仰」という公案 181 佐藤哲英先生の往生 183

実父の死 188 お念仏の有り難さ 192

十一、重ねて他力の教えに目覚める

多くの先生方に見守られて 197 土橋秀高先生の後半生 199

①定年前に大学を退職 199 ②奥様との死別 201 ③本堂と庫裏の全焼 202

④学者としての姿 204 ⑤本堂庫裏再建へ 205 ⑥子供さんとの突然の別離 207

⑦お孫さんとの別れ 211 ⑧先生のご心境 212

十二、土橋秀高先生とお念仏

土橋先生の後姿 217 「祈り」の問題 219

「あかねの雲は美しき哉」の問題 221 一切の障害物に障害がない 225

「黒雲」の大切さ 228 悲喜ともに慈恩なり 229

黒雲変じて光雲になる（法味愛樂の世界） 231 生活の中のお念仏 233

十三、他力の教えに納得しながらも……

一筆啓上母上様 238 「死が怖い」という実母の言葉 240

実母に説けなかった「お念仏」 243 浅田文太君という文鳥 245

人身受けがたく仏法聞きがたし 249 徐々に徐々に 252

あとがき 254

新書版あとがき 256

一、諸行無常を知る

親友の突然死

この世は「諸行無常」だということは、たえず聞く言葉ですから、私には理解できていたように思っていたのですが、実のところ心底納得していませんでした。それを私に教えてくれたのは私の高校時代の親友だったのです。彼の名前を「出野信君」といいます。

私は、平成元年の四月から一年間、龍谷大学の内地留学の制度によりまして、東京大学の印度学仏教学研究室へ寄せていただきました。留学当初より大阪にいる高校時代の三人の友達が東京へ行きたいと言ってくれておりました。しかし、なかなかその機会がありません。留学期間がそろそろ終わろうとする翌年の三月十七日に、三人が申し合わせて大阪から飛行機で羽田まで来てくれたのです。私は午後六時に空港へ迎えに行きました。久々に遇ったものですから、銀座へ出てお酒を飲みながら思い出話に花を咲かせました。気づいた時はもう夜中の午前一時を回っておりました。それでも話が尽きない

のですが、とにかくそれぞれの部屋へ帰って休みました。私を含めて四人ですので、二人一室の二部屋を借りてありました。朝目覚めた方が起こすことを申し合わせて眠りについたので。

私は案外早くに目覚めて、同室の友と話し合いながら、隣室から声がかかるのを待っていました。ところが九時を過ぎても声がかからないものですから、外出できるように支度をして隣の部屋をノックしました。そうしますと、一人が目を真つ赤にはらして出てきました。どうも二日酔いのようなようです。昨夜は部屋に入ってから何も知らずにぐっすり寝たというのです。「同室の出野君はどうした」と聞きますと「居ないよ」といいます。「朝早く起きて散歩にでも行ったのではないかな」というものですから「それじゃあ、帰ってくるまで待とう」と部屋に入りました。すると、散歩に行ったはずの出野君の靴が脱いであるのです。「靴も履かずに散歩に行くことはないだろう。すぐに捜せ！」と一人が叫びます。ホテルの一室ですから、目に付かないところと言えば、バスルーム

しかありません。私は急いでそこに駆け寄ってドアを開けようとしみますと、中から鍵がかかっているのです。ドンドンと叩いて「出野君いるか！」と叫んでも返事がありません。すぐにフロントに電話をかけて鍵を持ってくるように頼みました。しかし鍵が届くまでの時間が待てません。廊下へ出て掃除をしているおばさんに「どうすれば開きますか？」と聞きますと、持っていたハサミで鍵穴をこじってくれたのです。パチツと音がすると同時に中に飛び込みました。するとどうでしょう、出野君は湯も入っていない浴槽の中でぐったりしているではありませんか。水のシャワーが出たままになっていました。「出野君！……出野君！……」いくら叫んでも反応がありません。一人が心臓をマッサージします。同時に、もう一人は救急車を呼ぶために電話口へ駆けよります。私はただ「大変だ！」と叫んで右往左往するだけでした。

十分も経たない間に救急隊が到着して状況を診てくれました。しかしよく診れば、すでに身体が硬直して死斑すら出ているのです。「当方では、どうにもなりません。すぐ

に警察を呼んで下さい」そう言い残して救急隊は出て行きました。

彼は大変体力的には自信のあった人で、高校時代は相撲部に所属しておりました。大学を卒業してからは陸上自衛隊に入って幹部候補生として勤務していたこともあります。ですから大変健康な体格をしていたように私たちには映っておりまして。しかも、亡くなる当日、一時十五分まで全く変わった様子もなく私たちと話しておりました。その話の中で彼は「私には自慢できることが一つあるんだ。それは生まれてこの方、医者にかかったことがないんだ」と言うのです。虫歯で歯がボロボロになっても、歯医者に行かないのです。そして「人間には自然治癒力があるんでねえ……」そんなことを平気で語っていた彼です。それほど、身体的に自信のあった彼が、いとも簡単に死んでいったのです。

警察がやって来まして検証した結果、外傷がありませんので解剖に付すことになりました。虚血性心不全……これが死亡診断書でした。一般に言う心臓マヒだそうです。

諸行無常が納得いくまでの葛藤

今思い返してみますと、浴槽の中で死んでいる彼の姿を見た時は、悲しいという感情が起こらなかつたことを覚えています。涙が出てこないのです。何が起ったのか判らず、ただ茫然自失としておりました。大阪から彼の母親が駆けつけ、築地警察署の地下霊安室で彼と対面したのは、すでに夕方の四時を回っていました。まだ解剖が終わっていませんので、たとえお母さんであっても遺体には触れることが出来ません。お母さんが彼の顔を覆っている柩のガラスを撫でながら彼の名前を呼ぶのです。「信よ。信よ……」って。この時はじめて私に涙が出してきました。「出野君が死んだんだ」ということが納得できたからでしょうか。浴槽で彼を発見してから実に七時間余りが経過しておりました。

前夜に寝たならば、明朝に起きるのは当たり前……私たちはこれを当然の道理として認